

今朝はマタイの福音書 23 章 37～39 節までを皆さんと共に学んで行きたいと思います。マタイの福音書 23 章というところは、イエス・キリストの地上生涯における最後の公的な説教の記録であります。イエス・キリストの最後の 3 年半、十字架につけられて、死なれて葬られ、甦る。その時までの最後の 3 年半というのは、イエスが公に活動された、公に宣教活動をされた公宣教という時代であります。そのイエス・キリストの公宣教、public ministry と英語で言います。その中での最後の公説教です。public sermon というのがこのマタイの 23 章であります。記録されている限りこれがイエス・キリストが地上で行われた最後の公的なメッセージ、ラスト・メッセージということです。最後の公のメッセージですから重要であることは皆さんにもお分かりになるかと思えます。そのように捉える時に皆さんならばその最後のメッセージはどういう内容になるだろうか、またはすべきだろうかといろいろと思われると思います。私であれば恐らく最後のメッセージとするならば、それは救いの招きをしたいと。最後の最後になって本当に 1 人でも多くの人が救われるように、救いの招きのメッセージをしたいというふうに、私だったら考えるかもしれません。

ところがイエス・キリストのこのラスト・メッセージは、最後の公のメッセージは、当時の宗教指導者たちに対する大変厳しい激しい非難のメッセージ、弾劾メッセージでありました。これはちょっと意外に思われるかもしれません。彼らの偽善を暴露したわけですから。スッパ抜いたわけですから。そして指をさして糾弾したわけですから。そしてきつく断罪したわけですから。23 章を見て頂くと、イエスキリストはそんな彼らのことを「偽善の律法学者」律法というのはユダヤの法規ですから法律学者、または聖書学者という意味です。そして「パリサイ人」神の言葉に厳格に従った宗教指導者たちのことでもあります。彼らを偽善の律法学者、パリサイ人と。そしてさらには、目の見えぬ手引ども、白く塗った墓、蛇どもとか、まむしの末、サタン呼ばわりしたわけですから。悪魔呼ばわりしたわけですから。そして彼らの偽善を大変厳しくきつく断罪いたしました。これが、イエス・キリストが地上で行われた公宣教における最後の公的な説教、ラスト・メッセージでありました。

使徒パウロという人は、ローマ 2:4 というところで『神の慈愛が(慈しみとその愛が、恵みと憐れみが、神の愛が)あなたがたを悔い改めに導く』と語っております。神の慈愛が、神の慈しみが、言い換えれば神の愛が、憐れみが、恵みが、私たちを悔い改めに導くのだと書いております。神の慈愛、神の愛、憐れみ、恵みは、人を救いに導く上で、悔い改めに導く上で、神の怒りだとか裁きよりも有効である、優れた動機であるとパウロは語っているわけですから。神の慈愛が人を悔い改めに、救いに導きます。

その一方でパウロは、ある者たちはむしろ火によって救われるんだ。火というのは、神の怒りだとか裁きの象徴であります。ある者たちは火によってかろうじて救い出されると。これは第一コリント 3:15 に書いてあります。火の中をくぐるようにして助け出される者もあると。そのようにしてパウロは書いています。同じ人物が、一方では『神の慈愛が私たちが悔い改めに導く。』その一方では『火が、神の怒りが、裁きが私たちが救い出すのだ。』と。対照的なことを言っています。神の慈愛、若しくは愛、憐れみ、恵みに応答しなかった者は、神の火による裁き、烈火の如く厳しく迫ってくるような怒り、裁きのメッセージを聞く必要があるということが、そこから教えられます。

ですから、イエス・キリストも最初の 3 年程は父なる神様の慈愛に満ちたメッセージを語ってきたわけですから。神の慈愛が人を悔い改めに導くということで、イエス・キリストはほとんど公宣教の間は、神の愛、憐れみ、恵みについて語ってきたわけですから。ところがこの場面に来て、この後すぐにイエス・キリストは捕えられて、そして十字架刑にされるわけですが、この最後の最後に来て怒りと裁きのメッセージを語られます。それは、一部の宗教家たちは神の慈愛を軽んじてイエス・キリストを受け入れなかったからですから。このことについては、あなたがキリストの福音を他者に語る上で大切なポイントになるかと思えます。福音伝道においてこのことをあなたも是非適用して頂きたいと思えます。私たちは基本的には神の慈愛を最も多く語るべきであります。最初から神の火による裁き、火による怒り、「地獄に落ちるからあなたはイエス・キリストを信じなければいけない。」みたいな、そういうメッセージから切り出すのではなく

て、それは最後の最後には是非とっておいて下さい。むしろ私たちは全面的に「神様がどんなに愛に満ちた方か。どんなに憐れみ深い方か。恵み豊かな方か。あなたのために神はひとり子イエス・キリストを与えるほどに。ひとり子です。皆さんも子供を持つ者として分かると思います。子供の命は自分の命よりも大切であるわけです。それを差し出すほどに、与えるほどに私たちは愛されている。そのような愛は他にはありません。」そのような愛に私たちは動かされて、一人でも多くの人にこの素晴らしい神様のことを語り、神の用意されている素晴らしい祝福を一人でも多くの人に味わって欲しいと願い、福音を、すなわち good news を、ゴスペルを語るわけです。押し付けるわけではありません。強制するわけではないです。それは分かち合うというものです。乞食が大変なご馳走を発見したならば、自分でとてもそれは 1 人では食べ切れないものです。その時に「私には乞食仲間がいっぱいいる。こんなに素晴らしいご馳走を前にして、彼らにも黙っているわけにはいかない。どうせ 1 人でも食べ切れないのだし、彼らにも是非伝えて、彼らも一緒にこのご馳走に与って一緒に喜ぼう。一緒に楽しもう。一緒に助かろう。」それが私たちの動機です。私たちは皆乞食のような者です。皆不完全です。皆罪人であります。皆救いを必要としております。死ですべて人生が終わってしまうような空しい人生から私たちは解放されて、そして意義のある人生、死で終わらない人生が与えられていくわけです。それはイエス・キリストを信じることによって約束されている人生であります。そのようにして私たちは福音を宣べ伝え、でも中にはいくら神様の素晴らしさを語っても全く関心を持たない、むしろ馬鹿にしたりけなしたり、頑^{かたく}なまでに拒む人たちもおります。「そんなことには何の興味もない。現世利益が大事なんだ。死んでから後のことなんかどうだっていい。」勿論キリスト教は死後の世界だけを、天国ということだけをただ伝えているではありません。今の生活において、思い煩いから、心配事からも解放され、何があっても揺るがない平安もイエスを信じる信仰によってもたらされますけれども、ただそうしたことに興味がない。「あるのは目に見える繁栄だけだ、祝福だけだ、金儲けだけだ、人生の成功だけだ。好きな人と結婚して、好きな仕事をして、好きなものを手に入れて、人生面白おかしく、平安に安心して暮らすのが私の幸せです。宗教など要りません。イエス・キリストなんか自分には必要ないんです。」そういう人には最終的には、火によるメッセージを語る必要があろうかと思えます。それは時には怒りと裁きが前面に押し出されるメッセージであります。それをイエス・キリストがここで行われております。

23 章 13 節のところも見て欲しいと思いますが、『わざわいだ。』とあります。**14 節**のところにも『わざわいだ。』**15、16、23、25、27、29 節**の冒頭にもみな『わざわいだ。』という言葉があります。数えれば全部で 8 回『わざわいだ。』という言葉が記録されていることにお気づきになると思います。『わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。』と。わざわいだということ。呪いだということ。裁きだということ。イエス・キリストは 8 回連発して宣言しているわけです。この 8 回という数を聞くと、皆さんはもしかしたらピンとくるかもしれません。イエス・キリストの公宣教、パブリック・ミニストリーの最初の時点でイエスは、8 回の幸福・祝福をメッセージの中で語られました。公宣教の最後の公的な説教では、8 回のわざわいを語りましたけれども、公宣教の初めの公的なメッセージでは 8 回の幸福・幸せを宣言されました。それは『山上の説教』『山上の垂訓』と呼ばれるものの中の『八福の教え』というものです。8 つの幸福、8 つの幸いのメッセージであります。これについては皆さんもよく知っていると思います。マタイの 5 章に 8 つが見られます。「心の貧しい者は幸いです。(1 つ目の幸福です。1 つ目の幸せ宣言です。)天の御国はその人たちのものだから。」次に「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。」というふうに 8 つ「幸いです。幸福です。」と。それを 8 つの幸福『八福の教え』とか、または『至福の教え』とも言うもので、これをイエス・キリストは公宣教の初めに語られましたが、その一方で公宣教の終わりには 8 つのわざわいについて、呪いについて、裁きについて宣言されました。是非時間のある時に、この 8 つの幸いと 8 つのわざわいのメッセージを比較して学んで頂きたいと思えます。これは個人の学びとして大変有意義なものになると思えますから、チャンスがあればまたマタイの福音書をカバーする時にそのような捉え方をして皆さんにも分かち合いたいと思えますが、今は是非個人的にプライベートで 8 つの幸いと 8 つのわざわい、比較してみてください。面白い学びが出来ると思えます。この 8 つの幸いと 8 つのわざわい、これらは実に絶妙な相互関係にある、相関関係にあることにきっと気付くと思えます。

それが本題ではないので、今日のテキストの方に目を戻して頂きたいと思います。マタイの 23 章の終わりのところ
です。ですから、これが公宣教の最後のメッセージの最後の締めくくりということになります。最後のメッセージの最
後の締めくくりですから、一番重要なポイントだと言って良いと思います。結論にあたる部分です。37 節から 39 節ま
で通してお読みします。『³⁷ ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打
つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、
あなたがたはそれを好まなかった。³⁸ 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。³⁹ あなたがたに告げ
ます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたし
を見ることはありません。』イエス・キリストが“あなたがた”と語っているのは、偽善の律法学者、パリサイ人、当時の
宗教指導者たちのことであります。文脈を見て頂くと、彼らには裁きの宣告がなされています。8 つのわざわいが語
られて、ちょっと前の 36 節を見て頂くと『まことに、おまえたちに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来
ます。』“この時代”というのは、“世代”とも訳せます。generationとも訳せます。ですから、今イエスが語っているそ
の対象である律法学者、パリサイ人たちの世代の上に来ると。“報い”というのは、血の報いのことです。それが 38
節で『あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。』という悲劇をもたらします。

歴史的な事実として、この時から 38 年後の AD70 年にローマ帝国の将軍ティトゥス・ウェスパシアヌスという人が、
後に皇帝になる人ですけれどもローマ軍団を率いてイスラエルの町エルサレムに侵攻してきます。それがユダヤ戦
争と呼ばれるものになりますけれども、イスラエルは独立を目指してローマ帝国に牙を剥くわけです。テロ活動をし
て、そして何とかローマの圧制から自らを解放するためにゲリラ展開をするわけですけれども、しかしローマの将軍
が直接エルサレムに乗り込んでくるわけです。そして、結果的にはエルサレムは陥落します。“あなたがたの家”と呼
ばれているエルサレムの神殿も完全に焼き討ちにされて破壊し尽くされてしまいます。その結果、エルサレムの住
民少なくとも 100 万人が虐殺されました。100 万人です。今年も日本でも多くの死者を出した大きな地震がありま
した。大きな津波がありました。でも、その時であっても 3 万人にも満たない、死者と行方不明者の数を含めれば 3 万
人以下であります。でも、この時は 100 万人が虐殺されました。そして 9 万人もの女子供が、奴隷として外国に売り
飛ばされました。要するに拉致されたわけです。これらはすべて 36 節によれば“報い”と言われています。何の報い
か。それはイエス・キリストを自分たちの救い主として、自分たちのメシアとして受け入れなかったからです。実際に
受け入れた者たちは、このようなわざわいから、裁きから免れたわけまぬがです。あらかじめイエス・キリストによって、この
ようなことが起こるといことが警告されているからです。そのことが次章 24 章に記録されているんです。イエスを信
じる者たちは、エルサレムが敵に囲まれて、そして大変な悲劇が起こるといことを既に聞かされていましてから、
38 年後の AD70 年にイエスの言われた通りのことが起こった時、彼らはイエスの警告に従って、指示に従って逃げ
たので、彼らは助かったわけです。でも、イエスの言葉を信じなかった者たちは、イエスの宣告通りの裁きを、呪いを
その身に招いてしまいました。

そして 37 節のイエスの叫びに注目して下さい。『ああ、エルサレム、エルサレム。』この時イエス・キリストは号泣し
ていました。ここには泣いていたということが一切書かれておりませんが、並行記事がルカの福音書 19:41 に見ら
れます。並行記事というのは、同じ場面を記録しているものです。ルカという人が同じ場面を記録した時に、この時
イエスは涙を流していた、号泣していた、というふうに記しています。泣きながら『ああ、エルサレム、エルサレム。』イ
エスは知っていたんです。これからエルサレムの町に血の報いが下されるということ。勿論それは不可避なもの
ではなかったのです。イエスの言葉に従えば免れることも出来たわけです。そして、イエス・キリストが名前を 2 回繰り
返して呼ぶ時「エルサレム、エルサレム。」と。そういうケースでは常にイエス・キリストの心が痛んでいるんだ、悲しん
でいるんだ、ということが分かります。たとえばルカの福音書 22:31 というところで、イエスはある人の名前を 2 回繰り
返して、悲痛の叫びをしております。『シモン、シモン。(これはペテロのことです。ペテロの本名です。)見なさい。サ
タンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。』この後、シモン・ペテロは公の場
で「イエスなど知らない。」イエスとは何の関係もないんだ、ということ平気で言いかけてしまうんですが、それは自

らが迫害されることを恐れたからです。平気で愛する師匠を裏切ったわけです。

また同じくルカの福音書 10:41~42 にも、イエスはやはりある人の名前を 2 回繰り返しております。『⁴¹ 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。⁴² しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤは(妹のマリヤは)その良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。』』マルタとマリヤの姉妹です。マリヤというのは、これはイエスの母マリヤではありません。ベタニヤのマリヤと呼ばれるマリヤです。他にもマグダラのマリヤとか、マリヤという人の名前、これは一般的な名前でしたので多く見られるのですけれども、このベタニヤのマリヤのお姉さんのマルタに対して「マルタ、マルタ。」と。彼女は大切なポイントをすっかり見落としてしまっているわけです。何が一番重要なのか、必要なのか、見落としてしまっていたわけです。

他にも使徒の働き 9:4 に、ここには後に聖書の大半を記すようになる、後に世界中にイエス・キリストの福音を伝えて教会を建て上げるようになる偉大な使徒の回心が記録されています。この人はかつてはイエス・キリストのしもべたちを、クリスチャンたちを心から憎んで女子供も皆捕らえて投獄して、そして殺してしまうような激しい迫害者だったんです。もうキリスト教を毛嫌いしていた、頭ごなしに馬鹿にしていた、そんな人がキリストに出会って変えられてしまったわけです。これは、やはりイエスの言葉です。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』サウロ、後にパウロと呼ばれますが、彼はキリストの教会を迫害していたんですが、キリストの教会を迫害することはイエス・キリストご自身を迫害することに等しいのです。なぜならば教会はキリストのからだと呼ばれているからです。教会のかしらはイエス・キリストであります。それほどまでに教会は、私たちクリスチャンはイエス・キリストと親密な交わり・関係を持っておりま。一体となっていくわけです。そしてこの時にサウロは復活のキリストに出会って、すっかり心を変えられます。そして有名な“目からウロコ”の回心をするわけです。“目からウロコ”という言葉は、聖書から採られています。知らない人も多いと思うんですけれども、このちょうど使徒の働き 9:18 に出ています。目からウロコです。よく日本人でも使います。それは、本来はキリストに出会ってすべてが変えられた。本当の目からウロコの体験をしたければ、是非イエス・キリストをあなたの神として、救い主として受け入れて欲しいと思います。

そしてまたテキストに戻って頂きまして、マタイ 23 章 37 節のところを目を戻して下さい。「エルサレム、エルサレム。」と名前を 2 度繰り返す時、それはイエスの心がいつも痛んでいる時、悲しんでいる時であります。「エルサレム、エルサレム。」実際にイエスは涙を流されておりました。『預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。』これは石打ち刑にして殺すという意味であります。殺害するということです。マタイ 23 章 34~35 節を見て下さい。『³⁴ だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。³⁵ それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。』義人アベル。有名な最初の殺人事件の被害者です。カインとアベルの兄弟、聞いたことがあると思います。この記事については聖書の最初の書物である創世記に記録されています。創世記 4 章というところに、この有名な事件が記録されています。アベルはカインの手にかかって死んだ最初の殉教者ということなんです。迫害を受けて殺された者の最初でありました。そのアベルから始まって、バラキヤの子ザカリヤ。彼もまた信仰のゆえに迫害されて、そして殉教するわけですけれども、このザカリヤが死んだという記事については第二歴代誌 24 章に記録されています。この第二歴代誌という旧約聖書の書物は、ユダヤ人の使っているヘブル語聖書、ヘブライ語聖書の順番では一番最後に位置するものです。創世記がユダヤ人の使っているヘブル語聖書の最初なんです。そして最後は歴代誌で終わっているんです。私たちの使っている旧約聖書は、ユダヤ人の物とは実際に内容は変わらないんですが順番が変えられております。最後はマラキ書になっていますけれども、ユダヤ人たちの使っている聖書は最後は歴代誌というところであって、これが最後の書です。ですから、最初の書に登場する最初の殉教者アベルから始まって、最後の書に登場する第二歴代誌に記録されているバラキヤの子ザカリヤの死。これは何を意味するかというと、聖書の最初から最後まで、そこに登場する信仰者たちを迫害し、そして死

に追いやってきた。その者たちに対する血の報復が、血の報いが、血の裁きが、今この世代に、この generation の上に下るんだということがあらかじめ警告されていたわけです。皆殉教した者たちは、イエス・キリストのことを宣べ伝えた者たちです。旧約聖書の中に約束のメシアについて言及されているわけです。来たるべき救い主、その方について彼らは語り続けたんですが、でもそれを受け付けなかった者たち、嫌った者たち、彼らは旧約時代においても、そうした者たちを手にかけてきたわけです。そして究極的には、彼らが語っていたメシアのその当人を、約束のメシアその方を殺してしまうという、恐ろしい罪を彼らは犯すわけですけれども、そんな彼らに対して確かにイエスは激しい糾弾するようなメッセージをここで語っているんですが、でも最後の締めくくりのところでは、泣きながら「³⁷ああ、エルサレム、エルサレム。」と、彼らに対してそれでも『わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび(何度も何度も)集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。』聖書が記録されてもう数千年間、BC1500 年ぐらいから創世記は記録されています。それからずっと神を信じない、神を受け付けない、約束のメシアを拒否してきた者たち。そんな彼らをイエス・キリストは、ずっとひなを自分の翼の下にかばうように、招くようにして、何度も何度も呼びかけてきたんですけれども、それでも彼らはそれを好まなかったわけです。そしてイエスが実際にこの世に来て下さったわけです。神が人の姿をとって、イエスとしてこの世に来て下さって、そしてイエスが直接語って下さっているのに、直接招いて下さっているのに、それでも彼らはそれを好まなかったわけです。救いのメッセージを、招きを、永遠の命への招待を、すべての罪が赦されるというそのメッセージを、天国に行けますという約束を、彼らはすべて蹴ってきたわけです。それでも、めんどりがひなを命がけで愛し守るように、イエス・キリストは何度も何度も声をかけ、何度も何度も招き、そのように接してきたわけです。めんどりがひよこたちを守るその姿を、最近の現代の私たちはあまり身近には見ないかもしれません。この中には鶏を飼っている方もおられるので分かると思うんですけれども、ちょっとでも危険が迫ればひよこたちはすぐにお母さんの、めんどりのお腹の中に潜り込むように、翼の下に本当に入り込むように避難してきます。勿論そのように翼を広げて母鳥は自らの体を避難所にするわけです。前に話したことがあると思いますが、アメリカの有名な牧師が少年時代ちよど農場で育ったわけですが火事になってしまったわけです。そして家畜小屋が火事になって、ある程度大きな動物たちは避難させることが出来ましたが、しかし、中には焼け死んでしまったものもあったわけです。少年だった彼は、すべてが焼かれて灰となったその中をポツポツと歩いていました。灰の塊が見えたのでそれを蹴り飛ばしたところ、その中から数羽のひよこたちが一斉に飛び出して来ました。「これは一体どういうことだろう。どうしてこのひよこたちはあの火事の中で生き残ることが出来たのだろうか。どうして灰の中で彼らは生きていたのだろうか。」お父さんお母さんに聞いてみました。そうしたら、母鳥が、めんどりがきつと家畜小屋の中でもはや逃げ場がなくなったのでコーナーに追い詰められて、その時にひよこたちを自らの翼の下に招き入れて、呼び寄せて、そして身を呈して火からこの子たちを守ったんだと。そして実際に母鳥は焼け死にました、灰になりました。でもその中に守られていたひな鳥たちは、ひよこたちは生きて、そして灰の中から生還出来たわけです。そのようにしてイエス・キリストも私たちのことを身を呈して守って下さいます。自らの命を投げ出しても私たちを火の裁きから守って下さる。そのような愛に満ちた神であります、救い主であります。自分の翼の下にかくまってくださいる方です。永遠の火、地獄の炎から私たちを守って下さるためにイエス・キリストは十字架にかかって死んで下さいました。そのようなイエス・キリストが今も、今日も生きておられて、ここにいる皆さんにも救いの招きをしておられます。「私の翼の下に逃げ込んで来なさい。避難しなさい。そこには安心がある。そこには平安がある。そこには希望がある。そこにはすべての必要があるんだ。」と、「死んでもなくなる命が、天国の希望がそこにはあるのだ。」と、おっしゃっておられます。

マタイ 23 章続きを見たいと思います。38 節はそれが AD70 年に果たして文字通り成就したということを先程触れました。『³⁸あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。』ローマの将軍ティトゥス・ウェスパシアヌスによって本当に文字通り焼け野原となって、エルサレムの見事な荘厳な神殿も完全に破壊し尽くされたわけです。100 万人の人が虐殺され、9 万人もの女子供たちが奴隷として方々に売り飛ばされたわけです。最悪のことが起こったわけです。ただし、それはイエスの警告通りのことでありました。イエス・キリストを信じないで拒否して、そしてイエスの招き

を好まなければ、蹴ってしまうならば、拒否するならば、あなたにもこの災が、この報いがあなたの身にも起こることです。これも合わせて警告として覚えたいと思います。

そして 39 節のところに目を留めて下さい。『**あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。**』これが最後の公的説教の最後の締めくくりの言葉ですが、素晴らしい約束の伴うものです。どこが素晴らしい約束かと言うと、『あなたがたが言うときまで』というところに注目して下さい。『言うときまで』英語で言えば”until”「言うならば」ではないんです。「もし、言うならば」英語で言えば”unless”ではないんです。「言うならば」ということであれば、これは条件付きですから言わない場合もあるわけです。言うかもしれませんが、言わない場合もあります。でも、『言うときまで』”until”ということであれば、これはいつか必ず言う時がやってくる、という大前提をもって語っているわけです。あなたがたが『言うときまで』、言うときがいつか必ずやってくる、ということが示唆されているわけです。「言うならば」であれば、言わないかもしれない。希望がありません。でも、『言うときまで』。イエスは、彼らがいつか言う時がやってくることを示唆して大前提として語っていますから、これは素晴らしい約束であります。その時にはいくら「イエスを信じない。イエスは私たちの神ではない。救い主ではない。」と拒否しているその彼ら、ユダヤ人に対してイエスが目の前に現れて下さる。イエスを見ると。信じ受け入れるんだという時が必ず彼らにもやってくるという素晴らしい約束であります。イエス・キリストを拒否した結果、自らに報いを、報復を(血の報復というものです。)、呪いを、災いを招いてしまった彼らではありましたが、でもいつの日かその彼ら、ユダヤ人たちがここに言われているように『**祝福あれ。主の御名によって来られる方に。**』と、心の底から、真心からイエス・キリストに向かって叫ぶ日が、救いを求める日が必ずやってくるんだと。そして、その時にはユダヤ人たちは大挙して民族的に大規模な救いというものを経験するようになります。それはいつの日かやってくる、必ずやってくる^と示唆されていると言いましたが、それはいつのことなのだろうか^と皆さん興味を持たれると思います。イエス・キリストを拒否した者たちが、ユダヤ人たちが大挙して、大勢でこぞってイエスをメシア、キリストと信じる日がやってくるんです。そして、それは聖書の預言によればイエス・キリストが再びこの地上に戻って来られる日。それは再臨、second coming と英語で言います。再臨の時に彼らはイエスを自らの、自分たちユダヤ人の救い主メシアだと信じ受け入れるようになります。「そのイエス・キリストの再臨、聞いたことがあります。世の終りに何かそのようなことがあるみたいですね。」という認識があるかもしれませんが、実際にその通りであって、最後の世の終りの 7 年間(それを患難時代というんですが)、その患難時代の本当に終わりの終わりの時に、その時には有名なハルマゲドンの戦いというものが起こります。これもどこかで聞いたことがあると思いますね。“ハルマゲドン”というのはギリシャ語で意味は「メギドの丘」、これは地域を指すことです。「メギドの丘」で戦われる戦い。これは昔からの古戦場です。世界中からこのメギドの丘に集まっては大きな戦争が繰り広げられてきたわけです。今でもイスラエルを訪れると、このメギドの丘を見ることが出来ます。大きな平原です。最後の戦争がこの「メギドの丘」ハルマゲドンで行われるんですけれども、それはイスラエルの覇権を巡っての戦いになります。今、世界の情勢はすべてイスラエルを中心に回っています。そのことがだんだん皆さんにもハッキリ分かってきたと思います。聖書を信じている者は大昔からそのことを主張して来たんですけれども、でも「イスラエルなんていうあんな小さな国が、日本の四国程しかない国がどうして中心になり得るのか。」^{ひとごと}他人事のように「中東問題なんて関係ないです。」と多くの人は思っていたかもしれませんが、でも皆さんの世代なら分かります。オイルショックを経験した人には分かります。皆さんの生活に直接影響を与える、そういうことが皆さんの世代で実感されたと思うんです。でも、これは古代から言われてきたことです。世界はイスラエルを中心に回っている。世界情勢はすべてイスラエルによって左右されるんです。オイル・マネーもそうです。ですから世の終りになるとまさにこのエルサレムの覇権を巡って西から、ヨーロッパから、これは EU と今なっていますけれども、聖書の預言の中にヨーロッパがかつてのローマ帝国のように、復興ローマ帝国のように 1 つの国となって世界の覇者となっていく。そのリーダーこそが反キリストと、anti-Christ と呼ばれる人物であります。その西からの勢力と、そして東からの勢力。それは東から、日の出る方から 2 億人の歩兵を連れてやってくる。勿論これは中国のことです。1970 年代に既に中国は 2 億人の

歩兵を抱えているということを公式に発表しております。2億人の歩兵を所有する国など中国の他はないわけです。しかも東からやってくる。西と東からの勢力。そして北から南から、イスラエルの特にエルサレムという町の覇権を巡ってアラブ諸国、ロシアも皆やってくるわけです。アフリカの方からも皆やってくるわけです。イスラム勢力が皆このエルサレムの覇権を巡って集まる。これが最後の戦い、ハルマゲドンの戦いであります。エルサレムは四方を敵国に囲まれてしまうわけです。絶体絶命のピンチを迎えるわけです。その時に天からイエス・キリストが降りてくる。これが再臨と呼ばれるイベントであります。その再臨の時に天から降って来たイエス・キリストを見て、イエスはその後オリーブ山というところに降り立つのですが、そして地殻変動などもその時に起こると聖書は預言しています。お互いにエルサレムの覇権を巡って対峙し合っていた連合軍たちもイエスを見るや否や共通の敵として一斉砲撃をするんですけども、イエスによってすべての人類の最強の連合軍は一瞬にして敗退いたします。そしてエルサレムはイエス・キリストによって守られるということを体験するわけです。その時に彼らはイエスを見て、この言葉を発します。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』彼らは大挙して「イエスこそ、自分たちがかつて2000年前に十字架につけたイエスこそ、本当は私たちの救い主だったんだ。」これについては旧約聖書のゼカリヤ書12:9~11にも預言されております。『⁹ その日 (“その日”とありますが、これは世の終りのまさにハルマゲドンの戦いの最後の日です。)、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。¹⁰ わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者 (“自分たちが突き刺した者”これは十字架に突き刺した者、イエス・キリストのことです。)、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。¹¹ その日、エルサレムでの嘆きは、メギドの平地 (“メギドの平地”これは「ハルマゲドン」とギリシャ語で言われるものです。)のハダデ・リモンのための嘆きのように大きいであらう。』これが世の終りの預言として記録されています。ハルマゲドンの戦い、人類の最終戦争の際、イエスが天から降ってきたところをイスラエルの人たちは、エルサレムの住民は目の当たりにして、そして涙を流して悔い改めます。私たちが殺してしまったあのイエスが、自分たちの救い主だったんだと。勿論イエスは殺されたのではなくて、自ら命を投げ出して、彼らを救うために、永遠の滅びから、罪から救うために十字架にかかって死なれて、葬られて、3日目によみがえってくださり、そして天に上げられた方ですけども。でも直接イエスを十字架刑に追いやったのは、自分たちユダヤ人であるということに気付いて、そして涙を流して悔い改めて、イエスをキリストとして、メシアとして信じ受け入れるようになるわけです。このようにしてイスラエルは皆救われると、パウロという人はローマ11:26でこのことを語っています。イスラエルは皆救われる。素晴らしい約束です。必ず『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言う時が訪れるんだと。ユダヤ人たちが大挙して救われる日がやってくる。あれだけイエスを拒否したのが、あれだけキリスト教を毛嫌いだ者たちが、あんなに頑な者たちがいつか救われる日がやってくるんだと。素晴らしい約束、素晴らしい希望です。

ただ、ここに1つの問題があります。どういう問題かと言いますと、実はこのマタイ23:39のこの言葉は、すなわち『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』この言葉は既にユダヤ人の口からは語られていたからです。もう数日前のことです。実はユダヤ人たちはイエスに向かってこの言葉を既に語っているんです。それはマタイ21:9にあります。それはイエス・キリストが雌ロバの子の背に乗ってエルサレムにユダヤ人の王として公に礼拝を受けて、勝利入城されたその日であります。その日は“シュロの日曜日”と言われます。エルサレム中の人たちが迎え入れました。この時はちょうど過ぎ越しの祭りのシーズンでしたから、世界中から巡礼者が、おそらくは250万人もの人が集まっていたと歴史家は記しておりますが、大群の中でイエスはこの言葉を聞いたわけです。マタイ21:9のところにその言葉が記録されています。そして群衆は、イエスの前に行く者も、後に従う者もこう言って叫んでいた。「⁹ ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」とあります。“ホサナ”、これはギリシャ語読みですけどもヘブル語では「ホシアンナ」、その意味は「どうぞ救って下さい。今救って下さい。」これはカギ括弧に括弧されています。カギ括弧で括られているところは、これは旧約聖書からの引用ということになっています。新約聖書の中で旧約聖書が引用されている時は、このように

カギ括弧で括られていることがあるんですけども、その引用元の典拠は**詩篇 118 篇**というところにあります。この**詩篇 118 篇**は預言の詩篇であります。特にイエス・キリストに関する預言を中心に語っているものですから、メシア詩篇とも呼ばれます。その**詩篇 118 篇**是非聞いて頂いて、これが引用元、オリジナルのテキストです。その中で**19 節**から見たいと思います。『¹⁹ **義の門よ。私のために開け。私はそこからはいり、主に感謝しよう。**²⁰ **これこそ主の門。正しい者たちはこれよりはいる。**』「**義の門、主の門**」と言われています。これはエルサレムの城壁を囲んでいるところにある東の門です。東が入口になっています。そこからイエス・キリストは雌ロバの子の背に乗って勝利入城されたわけです。イエスによってこのことは成就したわけです。そして、イエスは再びこの世に戻って来られる。再臨の時も実はエルサレムの東の門から入城されます。でも今は実際にエルサレムを見て頂くと、そこはないわけです。つまり何が起るかと言いますと、世の終りになるとかつて **AD70 年**に破壊し尽くされたエルサレムの神殿が再建される日がやってくる。それが世の終りのサインです。そのことも新約聖書の中に預言されています。世の終りになると必ず破壊されていた、荒廃していた、廃墟となっていたエルサレム神殿が再建されます。「今はイスラムの岩のドームが建っているじゃないですか。」あの黄金の、よく写真で見るとあの岩のドームです。イスラム教徒によれば、その下にエルサレムの神殿があるんだと。エルサレム神殿の上に岩のドームが建てられているんだと主張しています。再建するためには岩のドームを破壊しなければいけません。それをすれば勿論世界は火で、核が必ず使われるような本当に悲劇しかもたらされないというふうに思うかもしれませんが、しかし驚くようなことがヨーロッパのリーダーである反キリストによってなされます。中東に7年間の和平条約が結ばれます。それが、患難時代と呼ばれる時代です。7年間。かつて誰も実現できなかった中東和平条約を、ヨーロッパのリーダーが見事やってのけて、そして彼はイスラエルに、エルサレムという町にユダヤ人たちが願って止まなかった神殿を再建します。岩のドームを破壊しないで、うまく再建します。実際にエルサレムの神殿の跡は、岩のドームの下ではないということが近年の考古学の発掘によって証明されています。そしてその跡がどこであるのかは、もう特定されています。そこには、神殿は建てられるという状況になっています。ただし、勿論これは勝手なことをすれば今この時点で大戦争が、世界戦争が起きてしまうのですけれども、それが回避される形で平和的になされると。隣合って岩のドームとエルサレムの神殿が並立する日がやってきます。

そこはイエスが再臨されるんですけども、話を戻しますと、その時にイエスが再びやってくると。もう一度**詩篇 118 篇**の続きですけども**21 節**のところ『²¹ **私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。**』ダビデという人がこの**詩篇**を書いたと思われていますが、これはメシア詩篇、イエス・キリストのことを語っている詩篇でもありますので、『**私**』これはイエスのことでもあります。

そして、**22 節**のところは『**家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。**』この言葉はイエス・キリストによって引用されております。先に聞いて頂いた**マタイ 21:42** に、この『**家を建てる者たち**（神殿を建設する者たち）の**捨てた石。**』神殿は石積みで出来ています。巨大な大理石を石切場で切って、ジャストサイズに切って、あと現場に持ち込めば設計図通りにただ組み立てていけばピッタリ合うように設計されていたわけです。その中で拒否された石があったわけです。その拒否された、捨てられた石、これがイエス・キリストご自身であると。でも、それがなければ神殿は建たないわけです。そのような石のことをイエスはご自身にたとえられて引用されたというのが、**マタイ 21:42**のところでは。

23 節で『**これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。**』これは人の思惑を超えた神の、絶対者の、主権者の驚くべき計画によるものである、意図によるものである。イスラエルがイエスをメシアとして受け入れないということ、拒否するという。悲劇でありますけれども、そこには驚くべき神の意図が、計画が背後にあるということがここに^{うかが}窺えます。

24 節に『**これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。**』どこかで聞いたことがあると思います。よく私たちが歌う賛美の中に **This is the day** (この日は、この日は、主がつくられた。)というあの歌です。ここから採られています。でも、その“この日”というのは、主が設けられた日です。そして、“この日”についてはイエス・キリストが今

から約 2000 年前、雌ロバの子の背に乗ってエルサレムに勝利入城されたその日のことを語っています。『これは、主が設けられた日である。』エルサレムにユダヤ人の王として公の礼拝を受けるようにイエスは初めて自らを神として、王として現したわけです。その日は主が設けられた日で、この日を楽しみ喜ぼう。

主がこの日を設けられたということについてはダニエル書 9 章 24～27 節のところに預言されています。聖書預言の中でこのダニエル 9 章が最も重要であり、最も不思議でエキサイティングな預言であります。そこには実際にイエス・キリストが来られる日が、何年何月何日とまで正確に預言されているからです。後で読んで頂いてもいいですし、よく分からない方はダニエル書 9 章のメッセージを聞いて頂きたいと思います。そこに書かれている預言は、「エルサレムを再建せよ。」という命令が出るんです。ちょうどダニエルの時代というのは旧約聖書の時代です。イスラエルはバビロニア帝国(新バビロニア帝国とも言います。)ネブカルネザル大王によって、ネブカルネザル二世という王によって侵略を受けて、そしてバビロンの国にイスラエルの住民は捕虜となって捕囚されていた時代です。その時代が過ぎて、次にメドペルシャ帝国が取って代わるのですけれども、まだイスラエルの人たちはバビロンの地に残されたままです、捕虜となったままです。でも、また再び祖国に帰ることがペルシャ帝国の時代に許されて、そして「破壊されていたエルサレムの町を再建せよ。」という命令がペルシャの王様から発令されます。その勅令が出てから、そこに書かれていることを読み解くと 483 年後に、そのエルサレムの勅令が発令されてから 483 年後に(1 年は 360 日というバビロンの暦があるんですけれども)、すなわち 483 年というのは 173,880 日後にメシアが(油注がれた者と書かれています。それがメシア、キリストことです。)やって来ると。それはカレンダーで数えると AD32 年 4 月 6 日の日曜日です。その日にイエスがまさに、「シュロの日曜日」と呼ばれるその日にイエスが雌ロバの子の背に乗って、この入城の仕方もゼカリヤ書に預言としてあらかじめ書かれているのですが、果たしてその通りに入城されたわけです。AD32 年 4 月 6 日の日曜日に、イエスはその日に、神が設けられたその日にエルサレムに入城されたのです。それが詩篇 118 篇の今見ている 24 節の『主が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。』と言われている日です。詳しくその預言の解釈については、是非ダニエル 9 章のメッセージを聞いて頂きたいと思いますが。

そして、次の 25 節。『ああ、主よ。どうぞ救ってください。(ヘブル語で一言で“ホシアンナ”ギリシャ語で音読みすると“ホサナ”。先ほどマタイ 21 章で読んだばかりです。“ホサナ”とは「どうぞ救って下さい。」正確には「今、救って下さい。))ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。』どうぞ救って下さい。今、救って下さい。ホサナの後の『ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。』ここに注目しておいて下さい。そこに印なりチェックを入れてみて下さい。『ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。』繁栄させて下さいという意味であります。

26 節に『主の御名によって来る人に、祝福があるように。(これを言う時まで、イエスを拒否したユダヤ人たちはイエスを見ることはない、と言いましたが、それを言う時がやってくると。世の終りに来るということです。)私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。』「主の御名によって来る人に、祝福があるように。」「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」と。「どうぞ救ってください。ホサナ、ホサナ。」と、AD32 年 4 月 6 日の日曜日にエルサレムの住民たちは、大群衆はイエスにこの言葉を叫んだのです。「どうぞ救ってください。今、救ってください。ホサナ、ホサナ。どうぞ栄えさせてください。どうぞ私たちに繁栄させてください。」彼らの願っていたことは、彼らが狙いとしていたことは、彼らの背後で考えていた思惑というのは、「どうぞ今救って下さい。このローマの圧制から。」イエスの時代、イスラエルはローマの支配下にありました。「ローマ帝国のこの圧制から、この重税から解放して下さい。人権が蹂躪されているんです。権利が奪われているんです。自由がないんです。好きに出来ないんです。いろいろな義務が課せられているんです。苦しいんです。どうぞ繁栄させて下さい。どうぞ独立させて下さい。どうぞイスラエルという国を復興して下さい。」それが彼らの叫んでいる具体的な内容・願いでありました。「ホサナ、ホサナ。今救って下さい。そして今独立させて下さい。今イスラエルを復興して下さい。」

しかし、イエス・キリストはそのために来たものではありません。イエスは十字架にかかって死ぬために来たのです。それはどういうことかと言うと、私たちの罪を贖うためです。私たちを永遠の滅びから救い出すためであります。イエス・キリストは私たちが地上で栄えるためではなくて、未来永劫にわたって永遠に栄えるため。天国という神の御国

に入り、そこで永遠に幸せに満ちて暮らすためであります。すべての罪が完全に赦されるためにイエスは来られたのです。ただ単に目の前の問題を解決するため、現世利益のため、人間の夢や願望を叶えるために来たのではないのです。でも、「ホサナ、ホサナ。」とエルサレム中の人たちは、イエスの願いとは裏腹に自分たちの願いをもって「どうぞ救って下さい。今救って下さい。ホサナ。どうぞ栄えさせて下さい。どうぞ繁栄させて下さい。祝福して下さい。」と、狙いがあったわけです。計画があったんです。アジェンダがあったわけです。裏があったわけです。

イエスは、じゃあ彼らの願い通りに動いたでしょうか。そうではなかったです。イエスはもう十字架にかかることを覚悟して、そのために、死ぬためにこの世に来られましたので、彼らの思惑通りにはいかなかったわけです。自分たちの願い通りではなくて、ローマ帝国を屈服させる、転覆させる。そしてイスラエルという国を復興する。そんなことがとてもできないと。イエスは十字架にかかって殺される。自分たちの夢を叶えてくれない。願望通りにイエスは動いてくれない。それが分かった途端に彼らは「ホサナ、ホサナ。今救って下さい。主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と言っていたその態度を翻し「除け、除け。十字架につけろ。」と一瞬にして彼らはのろいの言葉をイエスに向かって叫ぶようになりました。1週間も経たないうちにです。日曜日に「ホサナ、ホサナ。」と言っていたのが、もう数日経ったら「除け、除け。」自分の願望通りにイエスが動かない。私たちの願いを叶えてくれない。それが分かった途端に「十字架につけろ。死んでしまえ。お前なんか要らない。除け。失せろ。」そのように彼らは叫んだわけです。「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と言いながら、叫びながらも、実際には彼らはイエスを自分たちの主とはしていなかったわけです。むしろ「栄えさせて下さい。繁栄を下さい。祝福して下さい。自分たちの願いや要求、ニーズに応じて下さい。」まるでイエスをしもべのように扱っています。「自分たちの要求に応えるのが自分たちのメシアである、神である、救い主である。」これはこの世の宗教と同じです。この世の宗教は、自己実現のために利用します。願掛けするのも、お参りに行くのも、お札を買うのも、お守りを買うのも、全部自分の願いを叶えてもらうためです。でもそれは、むしろそれらの神々を自分の自己実現のために利用している、手段にしている、道具にしているに過ぎません。それは神とはもはや言えないものです。何の主権も持たない存在です。神とし^{うやうや}恭しく崇^{あが}めながら、^{さいせん}養^{やう}銭しながら、お布施をしながら、献金しながら、でも実際のところは自分の夢を、願いを叶えてもらうために利用しているに過ぎません。その神は、神ではないのです。むしろ、しもべです。アラジンのランプのような、サンタクロースのような、そんな自分の都合の良い存在であります。それはもう完全なる主客転倒というものです。

ですから「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と、「イエスに祝福あれ。」と言っているはずなのに、でも内心は「自分に祝福あれ。」と、自分の願いが通るように、自分の要求に応えるようにとイエスに望み、それが叶わなくなった途端に「ホサナ。どうぞ救って下さい。」から「十字架につけろ。除け、除け。お前なんか要らない。」と。「ローマを追い出して政治的にも経済的にも復興して繁栄をもたらす。それが我々の望みである。そのことしかお前には望まない。それをしないならば、除け。要らない。十字架にかけられて死んでしまえ。」と。政治的な軍事的な救い主を彼らは求めたのです。その一方でイエスは、罪から救うところの霊的なメシアとしてこの世に来られたわけです。思い通りに、思惑通りに、考え通りに行かない彼らは一瞬にして翻って、考え方を変えて、態度を変えて、イエスを拒否したわけです。

このようにイエス・キリストは、「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と彼らが本当に心の底から理解して叫ばない限りは、あなたがたが、私たちはイエスを見ることはない。」と言われたわけです。でも、言う時まで、その時まで、いつかその日がやってきます。それが、世の終りの患難時代です。**エレミヤ 30:7** というところでは、ユダヤ人にとってはそれは“**ヤコブの苦難**”と呼ばれています。ユダヤ人にとって苦しい時代がやってきます。第二次世界大戦中の迫害など比べようがないほど、世の終りになるとユダヤ人たちは世界中の人たちから憎まれます。反ユダヤ主義がそこに極まるのですが、その時代を患難時代。彼らにとっては“**ヤコブの苦難**”と言っているところですが、でもその時にイエスを自らの主とメシアと呼ぶようになって彼らは救われます。「イエスは主である。」太字で主と旧約聖書に記されているところ、これは神様の名前、固有名詞です。個人名ヤーウエというふうにも呼ばれます。イエスこそが主、ヤーウエである。イエスこそ神である。ただのユダヤ人の王様ではないのです。ただの政治的指導者ではな

いのです。ただの道德の教師、ただの宗教家ではないのです。イエスは神、主であると。そのことが認識されれば、彼らは、私たちはイエスを見ることが出来ます。でも、その時まではイエスを見ることは出来ません。

私たちにとっての意味を最後に考えたいと思います。「ホサナ。どうぞ救って下さい。今救って下さい。」と、そう叫びながらも、「ホサナ。私には仕事が必要です。」「ホサナ。私にはお金が必要です。」「ホサナ。私には健康が必要です。」と言って、仕事ももらえない。お金も入ってこない。健康も取り戻せない。そうなった途端に「除け、除け。十字架につけろ。イエス・キリストなんか所詮は自分の願い通りにはやってくれない。神じゃない。要らない。」どうでしょうか。皆さんにもそのようなアジェンダが、思惑、計略、そのようなものはないでしょうか。「ホサナ。」と賛美しながら、それはひも付きではないでしょうか。ヨイショと持ち上げておきながら、実際には何かを強請^{ねだ}っている。祈りながらも、賛美しながらも、このように礼拝に集いながらも、「ホサナ、ホサナ。」と叫びながらも、心の底では「栄えさせて下さい。繁栄させて下さい。私の要求に答えて下さい。願い通りにやって下さい。自己実現、夢を叶えて欲しいのです。」それは人間がつくったこの世の宗教です。そのような存在はもはや神ではなくて、ただの道具・手段に過ぎません。

でも、一度^{ひたび}「ホサナ。」と言いながらも、「今救って下さい。」と言いながらも、「主の御名によって来られる方に祝福あれ。あなたこそ神です。あなたこそ主です。私はあなたのものです。あなたが主ならば、私はあなたのしもべです。」今がどうであれ、イエス・キリストを主として心で信じて、口で告白して、救われて、クリスチャンとなって、それがどういう状態であれ。金持であろうと、貧乏人であろうと、それでも「主の御名によって来られる方に、イエス・キリストに祝福あれ。」健康であろうと、病弱であろうと、高級マンションに住もうと、あばら屋に住もうと、出世しよう、左遷されようと、「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」結婚しよう、結婚しまいと、就職できようと、就職できまいと、「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と私たちは言えるでしょうか。私のために、あなたのためにイエス・キリストがどのようなことをして下さったのか。十字架にかかって死んで下さった程にあなたを愛して下さって、あなたのためにはすべてをして下さるお方。その方にすべてをあなたは明け渡せるでしょうか。

皆さんに配っています週報のところに、私の大好きな人たちの、ヒーローと私が思っている人たちの珠玉の名言がまとめられているものがあります。その中で C.T.スカッドという人、19 世紀の宣教師です。その彼の言葉を沢山ある中からこれだけ今皆さんに読み上げたいと思います。「私は、私のために死なれたイエスのことを知ってはいた。しかし、主が私のために死なれたのなら、私はもはや自分のものではないということが全く分からなかった。贖いと、買い戻しであるから、もし私が主のものであれば、泥棒になって自分のものでないものを持つとするか、すべてを神の前に明け渡すかの 2 つに 1 つである。イエス・キリストが私のために死なれたことがハッキリ分かった時、主にすべてを捧げていくことは難しいとは思われなかった。」もう一つ「イエス・キリストが神であり、私のために死なれたのなら、主のために尽くす犠牲はどんなに大きくても大きすぎることはない。」私のヒーローの言葉です。他にも沢山同じような言葉がその中にあり、また祈りもありますので、是非じっくり読んで瞑想して頂きたいと思います。イエス・キリストがこの私のためにして下さったこと、それを思うならば、イエスが主です。私はしもべです。私はイエスのもの。イエス・キリストが主人であるならば、主人の願い、主人の望み、主人の意向に沿って、それが神の御心と呼ばれるものですが、それに沿って生きることが私にとってのすべてであると。私の願いよりも、主人の願い。それが最高である、ベストであるということを知るわけです。

詩篇 118 篇 27 節には『主は神であられ、私たちに光を与えられた。枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。』“祭壇の角”というのがありますけれども、祭壇には 4 つの角が、四角い角があつて、そこに角があるんです。形状として角がついているのですが、それは祭壇の上にいけにえを乗せた時にいけにえが落ちないように縛り上げるための部位であります。その角のところにロープを引っ掛けて、祭壇の上の動物と結ぶわけです。そうすれば落ちないわけです。その祭壇の上に捧げられる捧げ物、それが私たち自身です。私たちは、イエスを主とした以上は自分を差し出すもの、自分を捧げると。それが礼拝という行為でもあります。礼拝は捧げるという行為です。自分を差し出すという行為です。自分を委ねる、明け渡す、任せるという行為です。それがまた信仰という生き方でもあります。「自分の願い通り、思い通りにイエスがやってくれない。だから十字架につけろ。」他人事と思わない欲し

と思います。私たちも実際には同じようなことをしているわけです。すぐに自分の思い通りにならないと私たちは祭壇から降りようとしします。ここでは**祭壇の角のところまで**、とありますが、そこに縛られていくということを言っているわけですが、イエスに従いたくない私たちは、すぐに祭壇の上から降りようとしします。自分の願いが叶えられているうちは「ホサナ、ホサナ。」と言って礼拝を捧げます。そして祭壇の上にも喜んで乗ります。でも、一度自分の願い通りに行かないと、物事が運ばないとすぐに祭壇の上から降りようとしします。「だからもう私はイエス・キリストには従わない。信じない。もう捧げ物もしないし、祈りもしないし、教会にも行きません。」それが私たちであるのでしょうか。教会では賛美します。『皆捧げまつり、I surrender all、我がものはなし。』本気で言っているのでしょうか。『皆捧げまつり、我がものはなし。』本当に心の底からそのように言っているのでしょうか。もしかしたらそこには紐がついているのでしょうか。『皆捧げまつり、私の願いを叶えて下さるならば。そうでないならば、すべては我がものです。あなたのものではありません。』『除け、除け。あなたは要りません。十字架について死んで下さい。』と。私たちが本気で真剣に心の底から「主の御名によって来られる方に祝福あれ。」という言葉を理解しない限りは、私たちはいつまでたってもイエス・キリストの実体を、姿を見ることはありません。イエス・キリストを見る時、それはあなたが自らを捧げている、祭壇の上に乗って縛られている、その時であります。祭壇に戻る時に、その時に私たちはあらためて「あなたが主です。あなたに祝福あれ。」と。「あなたの望まれるように、お好きなようにして下さい。」と。「私はあなたのもです。人生がどうなろうとあなたにすべてをお任せします。どういう方向に進もうと、人生に何が起ころうと、主よ。あなたの御心のままに。」と。その時に私たちはイエス・キリストを見る事が出来ます。あなたは祭壇から降りていないのでしょうか。完璧な完全な平和・平安というのは、イエス・キリストの翼の下に身を寄せる時です。避難する時に必ずそこにあります。翼の下に、そこに、避難所に、完全な平和、完全な満たしがあります。もう安心していいのです。何の恐れも心配も抱く必要はありません。「イエスは私の主です。」と、心で信じて告白する時に、それはすべてをその方の御手に委ねる、何もかもこの方の翼の下に持って行くということです。あなたの思い煩いも、あなたの恐れも、将来に対する不安も、何もかもです。経済的な問題も、人間関係の問題も、健康不安も、家庭でのトラブルも、夫婦の悩みも、親子の苦しみも悲しみもです。何もかも翼の下に持って行くわけです。そうするとそこには驚くような平安が、満たしがあります、もたらされます。たとえあなたの人生が、イエスを主としたことによって劇的にそのコースが変えられてしまうようなことがあっても、あなたは平安で居られます。むしろそれを喜びと出来ます。

13歳か、14歳か、もしくは15、16歳。彼女は主を心から愛していました。彼女は聖書をよく知っていました。彼女の歌を聴けば、それが分かります。彼女賛歌を聴けばそれが分かります。彼女はナザレという村の若い大工と結婚することになっていました。ところがその彼女とそこに神が天使を遣わして「あなたは超自然的に身ごもります。」と。「処女なのにあなたは妊娠します。懐妊します。」という宣告をされたわけです。ショックですね。当時は、勿論それはマリヤのことですけれども、当時はヨセフとマリヤは法的には結婚していましたが、まだ物理的には同居していません。夫婦関係、いわゆる性的な関係はまだ持っていなかったんですが、それは法的には既に結婚したものと見なされていました。でも、そこに御使いが来たわけです。まだ性的に関係を持つ前にです。処女のあなたが身ごもる。処女懐妊。そんなことを言われたら、あなたはどうするのでしょうか。聖霊によって身ごもる。ヨセフはそんなことを言ってもきくと信じてくれないだろう。そうなれば結婚は取り止め。離婚問題。そしてイスラエルでは不倫を犯せば石打ちの刑、処刑になると。両親だって信じてくれないだろう、理解してくれないだろう。勘当されるかもしれない。周囲からどこへ行っても白い目で見られる。姦淫の女、不倫の女、ふしだらな女、娼婦だと、売春婦だと指をさされてしまう。何年も何十年も何百年も何千年も、今日に至るまでマリヤはそのような疑惑の目で白眼視されるようなことになっているわけですが、それでもその時彼女は何と言ったのでしょうか。**ルカの福音書 1:38** に有名なクリスマスのシーンです。『マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。(女奴隷です。)どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』『どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。』と彼女は言ったんです。もしかしたらこれが離婚問題に発展するかもしれない。もしかしたら自分は石打ちにされて殺されるかもしれない。もしかしたら両親にも勘当され、コミュニティーからも追い出され、どこへ行っても売春婦、売女とレッテルを貼られて、指をさされ

て、一生暮らしていくことになるかもしれない。それでも彼女は、「神様のおことばどおりにこの身になりますように。主よ、あなたのお望みのままに、お好きになさって下さい。ヨセフのことはあなたに任せます。私が言っても彼は信じてくれないでしょう。両親のこともあなたに任せます。あなたが説得して下さい。もう心配しません。あなたの言われる通りにやります。望み通りにやりますから。」もし、なんてことは、もう彼女は一切悩まなかったわけです。完全に委ねきったんです。マリヤは自分の決意を後悔したと思いますか。実際に皆さんどう思うでしょうか。もし彼女が「否、そんなことはとても受け入れ難いです。無理です。だってそんなことが起これば、ヨセフと結婚もおじゃんだし、私の将来はすべてなきものになります。こんなリスクはとても負えません。」でも、彼女は「主のおことばどおりにこの身になりますように。」結局マリヤはヨセフという人とも結婚出来ました。そしてイエスの下に、ヨセフとマリヤとの間に生まれた子どもたちも与えられました。そのうちのヤコブとユダという人物は、聖書を書いた記者となりました。ヤコブの手紙、ユダの手紙の記者です。ヤコブはエルサレム教会の重要な指導者にもなりました。ペテロとヨハネに並んでエルサレムの教会の指導者にもなりました。偉大な人物を生み出すことになったわけです。13歳、14歳、15歳、その少女のマリヤが「私は主のはしためです。私はあなたのもです。あなたが主ですから、私は主ではありません。だからあなたの思うように、願うとおりに、望みのままにして下さい。」その彼女は歴史上最も偉大な女性、最高の人生を地上で歩んだ人。これから先も彼女のような人はいないと思います。そんな彼女がイエスに対して言ったことは、まさに「主の御名によって来られる方に祝福あれ。そのことばどおりにこの身になりますように。あなたが主です。私は主ではありません。あなたの望むままにお好きなようになさって下さい。」

「私には願望があります。夢があります。計画があります。将来をいろいろ計画しています。ビジョンがあります。でも、それでも私はあなたのもです。どうぞあなたの望むままに。主の御名によって来られる方に祝福がありますように。」と、マリヤは言ったわけです。その彼女の人生には一点の迷いも曇りも後悔もなかったと思います。素晴らしい偉大な人生を歩んだことは誰もが認めるところであります。

そのことを最後、皆さんにチャレンジしたいと思います。主に従うことによって、主のものになることによって、主に自分を差し出して、明け渡して、委ねていく時に、場合によってはマリヤのような体験をするかもしれません。自分の夢とは違う、思惑とは違う、計画通りではない。急に人生のコースが変えられてしまう。理解の及ばないようなことがその身に起こる。リスクが伴うようなそんなことも身に起こるかもしれません。もしこれをしたらどうなるだろうか。いろいろ考えたら、いろいろ心配したら、結局は従いきれません。任せきれません。チョイスはあなたに任されています。イエスを主とするか、それとも自分を主のままで留めてキープしておきたいのか。どちらを選ぶでしょうか。「主の御名によって来られる方に祝福あれ。ホサナ。どうぞ救って下さい。今救って下さい。あなたの御心のままに、望むままにして下さい。」と、あなたは語るのか、叫ぶのか。それとも、「ホサナ。」と言いながら、自分の願い、自分の夢、自分の計画、思惑、自分の祝福を要求して、そしてその通りに神様が応えない、動かないであるならば、「除け、除け。十字架につけろ。もう神なんか要らない。神なんか、あるものか。」その生き方は対照的であります。血の報いをその身に負ったユダヤ人たちと、そして同じユダヤ人の女性ではありますがマリヤという1少女。是非比べて頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。